家族生活にあらわれる住生活スタイルとその志向性

農村住居における住生活スタイルの連続性と変化に関する実証的研究

秋田県仙北郡の典型事例の場合

THE DWELLING STYLES OBSERVED IN FAMILY LIVES AND THEIR TENDENCY

A case study on the continuity and changes in the dwelling styles of rural housing
Case of the rural housings in Senpoku, Akita

塩谷寿翁*, 下原拓也**

Toshio SHIOTANI and Takuya SHIMOHARA

The study clarifies the structure of dwelling styles of people living in rural housings where civilization of present age has been in progress, focusing on their contemporary and traditional aspects. The dwelling style which predominates among them and the way in which parts of the dwelling style are formed into a whole can be obtained using the relations between superficially observable elements such as how such action is taken, how they before, how the field of their family life is made up. Behavioral patterns related to the rural dwellings are diversified, but can be classified into several dominant categories. This categorization became possible because the way these dwelling styles were consolidated through socialization and firmly lodged as permanent in our society, has been actualized. The dwelling style is making steady progress under the influence of the above elements which increase in number in their multicultural community. There is a gradual change in the style of their houses resulting from that of their family life which has a long tradition.

Keywords: dwelling style, rural housings, family lives, configuration of culture, behavioral pattern, posture

住生活スタイル, 農村住居, 家族生活, 文化類型, 行動のしかた, 姿勢

1. はじめに

1.1 研究の目的と内容

この研究は、現代化がすすむ農村住居の家族生活の場¹⁾で再編成され統合化されつつある住様式にあらわれるしくみの実態とその志向性とを、生活体の行動的側面に視点を置いて実証的に追求しようとするものである。

1960年代から後の時期にもたらされる生活文化の変容および生活技術の転換による住生活の要素の豊富化のもとで、新旧の要素の結合関係は、いちおうの統合化された形態として現代の農村住居にあらわれているのではないかと、筆者は考えている。この現代の農村住居における住様式のしくみにあらわれる伝統性および変容の実証は、現代の住に関する文化類型の説明に基礎となる知見をもたらす現代の日本人の住生活の基層にながれている行動のしかたの理解を深めることにつながるものである。このみかたについてはすでに前稿^{*1)}で述べている。

前稿では、住様式の行動的な側面の把握を事例的におこなっている。それは生活体の行動のしかたを家族生活

の場で直接に観察する採取資料にもとめたものである。

そこでは住居における生活体の行動のしかたの概念が住様式のしくみの説明にとって有効なことをたしかめることができた。

つづいて本稿では、対象住居に秋田県仙北郡の「家族接客一体型」²⁾の農村住居の典型の少数事例（以下、標本住居）（図1）をえらぶ。標本住居の地域的特徴をふまえながら現代の農村住居で形成されつつある住様式のしくみにふくまれる普遍性の追求への接近をつづけておこなおうというのである。

本稿でとりあげる内容は、まず第1に、生活体の集団の傾向としてとらえることのできる住生活スタイル*の形成動向（以下、実態レベル）を把握することである。また住生活スタイルの現在の諸側面がどのように認識されているのか（以下、認識レベル）をとらえる。さらにこの両者の比較から住生活スタイルが近未来にどのような志向性をもち展開しようとするのかをさぐろうとする。

本稿は、文2)文3)をもとに加筆・修正したものである。

* 大阪工業大学工学部建築学科 助教授・学術博士

** 伏見工業高等学校 教員・修士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Osaka Institute of Technology, Ph. D.
Fushimi Senior High School, M. Eng.

図1 標準住居の要素空間

第2には、生活体と生活の場とのかかわりあい（以下、行動のしかた）³⁾を外面的な（外からみてよくわかるような）要素の体系としてとらえる。

*この研究では、住様式を行動的な側面に視点を置いて追究しようとしている。これまでに一般的にもちいられてきた住様式という言葉は、住宅と住生活に関係するさまざまな概念をふくんで使われている。この意味から考えると、この研究であつかうのは住様式の部分概念である。住様式のひとつの側面を説明するにすぎないのである。そこで、この従来につかわれてきた概念との混同をさけるために、この研究では、これより後の記述で、住生活スタイルという言葉を使うことにする。これは、生活体の集合の傾向としてとらえられる行為のおこなわれかた・行為の場のくみたてられかた・身体動作のしかたを総合化する概念である。

1.2 方法と資料

家族生活の場における住生活スタイルの行動的側面は、行為のおこなわれかた・行為の場のくみたてられかた・行為にともなう身体動作のしかたの3つの側面（以下、住生活スタイルの3要素）から説明できる。これは既研究一文¹⁾にしめす研究など一からえられる仮説である。

研究の方法および資料は次のようである。

(a)本稿は、標準住居に居住する家族（表1）のうち第1世代および第2世代の女性を対象にする採取をもとにするものである。

角館町・中仙町・田沢湖町の農村住居よりえらんだ標準住居の11家族で、①住居空間のくみたてられかたを観察調査し、②家族のうち2世代にわたる成人の女性（第1世代：10人・平均年齢満65.5歳、第2世代：9人・平均年齢満43.5歳）をインフォーマント（以下、標本）に、住生活スタイルの実態および認識のされかた・行動のしかたを面接により直接に聞き取り採取した。採取は1992年6月から8月にかけておこなっている。

(b)実態レベルにおける住生活スタイルの形成のされかたおよび認識レベルでの住生活スタイルについての認識のされかたは、住生活スタイルの3要素をくみたてているとみられる次の内容（以下、説明軸）から説明する⁴⁾。

行為のおこなわれかたの説明軸：行為の場的なかさなりかた（混在・非混在） 行為の場の分化移行のしかた（分化・未分化）

場のくみたてられかたの説明軸：家族生活の場の分節のされかた（分節・非分節） 行為の場のしつらえられかた（和・洋） 身体動作のしかたの説明軸：行為にともなう姿勢のとりられかた（床面に依拠する姿勢・非床の姿勢）

(c)住生活スタイルについての認識のされかたは、それぞれの説明軸の内容をあらわす項目（表2、表3、表4）についての生活体の反応のしかたから把握する。

それぞれの説明軸ごとにもうけた項目にたいする生活体の回答—そう思う（好ましい）、ややそう思う（やや好ましい）、ややそう思わない（あまり好ましくない）、そう思わない（好ましくない）—のうち前2者および後2者のしめす傾向から住生活スタイルの認識のされかたにあらわれる志向性を判断する。

表1 家族の構成

標本 住居	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
家族 の 構 成	イ.農業 A ロ.会社員 B ハ.主婦 B	イ.隠居 C ロ.農業 A ハ.農業 A ニ.主婦 A	イ.畜産 C ロ.農業 A ハ.農業 A ニ.農業 A	イ.畜産 C ロ.農業 B ハ.会社員 A ニ.会社員 B	イ.主婦 C ロ.農業 A ハ.主婦 A	イ.隠居 C ロ.農業 A ハ.主婦 A	イ.農業 A ロ.会社員 A ハ.主婦 A ニ.会社員 C	イ.農業 A ロ.主婦 A ハ.公務員 C	イ.隠居 C ロ.主婦 C ハ.農業 A ニ.主婦 C ホ.農業 A	イ.隠居 C ロ.畜産 B ハ.主婦 B ニ.農業 A ホ.主婦 A	イ.隠居 C ロ.公務員 A ハ.主婦 A
採取地	角館町	角館町	中仙町	中仙町	田沢湖町	田沢湖町	田沢湖町	田沢湖町	田沢湖町	田沢湖町	田沢湖町

△：男性、○：女性、＝：夫婦、記入数字は満年齢（調査時）。A：日常的に農業に従事している、B：農繁期のみ従事している、C：農業にはまったく従事していない。

(d)認識レベルに対応する実態レベルの住生活スタイルの3要素の内容を比較して、両者のあいだにあらわれる差異から住生活スタイルの志向性をさぐる。

以上は生活体ごとにとらえる。現代の農村住居では住生活スタイルのあらわれは個別的なものとしてあらわれるものと推測するからである。

(e)家族生活の場における行動のしかたは、①標本住居の家族生活の場にあらわれる住生活行為⁵⁾とその場的な領域性、②行為にともなう身体動作のしかた⁶⁾、③行為の場⁷⁾と身体動作のしかたとの関係を把握し、④行動のしかたをくみたてる要素の結合関係から行動のしかたの型を抽出して説明する。

行動のしかたは、家族生活の場でおこなわれる行為の系べつに具体的な行為をしめして、それぞれの行為ごとに、行為にともなう身体動作のしかた・行為のおこなわれる場を、前述の19名のインフォーマントから直接に聞き取り採取した（これは実態レベルの住生活の3要素の内容とは別に採取している）。

2. 住生活スタイルとその展開

2.1 家族生活の場の形成のされかた

標本住居は主屋・付属屋などから構成されている。主屋では日常非日常の生活における使われかたからみて要素となる部屋など（以下、要素空間）が集合して配列される。主屋の床上部分と土間部分とにわたる要素空間は標本住居のあいだで概括的には共通するものである。

この主屋のくみだてられかたは、1960年代における標準的な間取り形式でみられたものとおおきく変わっていない。1960年代から1990年代の時期（以下、変容期）にすすんだ建築更新は、主として食事炊事など家族生活に対応するとみられる部屋に関係するものだが、それは家族生活の場であるダイドコ・ミズヤなどの要素空間のあいだの位置的な関係をかえるものではない。

行為が場的に混在するもの (%)

項目	行為	実態レベル	認識レベル
1	食／親接	26.3	47.4
2	休／親接	73.7	79.0
3	食／あ接		15.8
4	休／あ接	15.8	26.3
5	休／家1	77.8	84.2
6	休／家2	70.6	84.2
7	休／個1	63.2	57.9
8	食／個2	21.0	31.6
9	休／個3		15.8
10	休／個4		21.0

家族生活の場（家族が食事をしたり休息をとったりする部屋）におけるふたつの行為の場的な混在のしかたをあらわしている（ここでは混在するものの割合）

図中数字は全標本（19人）にたいする割合 項目は表2参照
行為は場的な混在のしかたをみる行為をならべてある

食：食事、休：休息（食事後のくつろぎ） 親接：親しい間柄の客の応対 あ接：あらたまった間柄の客の応対 家1：家事（洗濯物をたたむ） 家2：家事（アイロンをかける） 個1：個人的生活行為（仕事や勉強をする） 個2：同（昼寝・ごろ寝をする） 個3：同（就寝する） 個4：同（外出まえ・帰宅のあとの着替え）

図2 行為の場的なかさなりかた（実態レベル、認識レベル）

2.2 行為のおこなわれかたとその展開

(1) 行為の場的なかさなりかた

家族生活の場における行為の混在性は、家族生活行為（食事、休息：食事後のくつろぎ）、接客生活行為（親しい間柄の客の応対、あらたまった間柄の客の応対）、個人的生活行為（仕事や勉強、昼寝・ごろ寝、夜間の就寝）の場的なかさなりかたから説明できる（図2）。

実態レベルの行為のおこなわれかたは、①標本住居において変容期まえに保たれていたとみられる家族生活行為と接客生活行為とが場的にかさなるような行為の場的な重層性が一部に継承されたものである、また②家族にとって最もウチ向きの行為とソト向きの行為、ウチ向きの家族生活系の行為と個人的生活行為とが場的に混在しない傾向をもつものである。

表2 行為のおこなわれかたをあらわす項目

行為の場的な混在・非混在	行為の場的な特定・不定
1 食事の場で親しい間がらの客を応対する	1 4 炊事（食材料の水洗いや調理・加工）はおなじ場です
2 休息の場で親しい間がらの客を応対する	1 5 食事の場はいつもおなじ場です
3 食事の場であらたまった間柄の客を応対する	1 6 休息の場はいつもおなじ場です
4 休息の場であらたまった間柄の客を応対する	行為の場の分化・非分化
5 休息の場で家事（洗濯物をたたむ）をおこなう	1 7 食事は「ダイドコ」でとる
6 休息の場で家事（アイロンをかける）をおこなう	1 8 食事は「ミズヤ」でとる
7 休息の場で個人的生活行為（仕事や勉強する）をおこなう	1 9 休息（食事後のくつろぎ）は「ダイドコ」でおこなう
8 食事の場で個人的生活行為（昼寝・ごろ寝をする）をおこなう	2 0 休息（食事後のくつろぎ）は「ミズヤ」でおこなう
9 休息の場で個人的生活行為（就寝するなど）をおこなう	2 1 親しい間がらの客の応対は「ダイドコ」でおこなう
1 0 休息の場で個人的生活行為（更衣するなど）をおこなう	2 2 親しい間がらの客の応対は「ミズヤ」でおこなう
家族生活行為おこなわれかたの単独・集団	2 3 親しい間柄の客の応対は「ナカマ」でおこなう
1 1 食事（夕食）は家族がそろってとる	2 4 あらたまった間柄の客の応対は「ダイドコ」でおこなう
1 2 休息は家族そろっておこなう	2 5 あらたまった間柄の客の応対は「ナカマ」でおこなう
1 3 テレビは家族がそろってみる	2 6 あらたまった間柄の客の応対は「ザシキ」でおこなう

それぞれの項目は、聞き取りにもちいた言いまわしを簡略にしてしめしている。

休息：家族が休息をとったりくつろいだりする（食事のあとにくつろぐなど）

家族生活の場で行為が場的に混在する重層性を継承しながら、いっぽうでは、家族と社会および家族と個人の関係があらわれる行為の場を分けるような使われかたが生じているのである。

具体的には、①休息と親しい間柄の客の応対、休息と家事（洗濯物をたたむ、アイロンをかける）、休息と仕事・勉強などの行為の場は場的に混在する傾向にある、しかしながら、②家族にとってもっともウチ向きの食事と親しい間柄の客の応対・あらたまった間柄の客の応対、休息とあらたまった間柄の客の応対は、ほとんど混在していない、また③個人的生活系の行為（昼寝・ごろ寝、就寝、更衣）は家族生活行為とは非混在の傾向にある、のようである。

この実態レベルで基調になる行為の場的な混在のしかたは認識レベルでも変わらずに認められる。しかしながら留意すべきは、実態レベルに比較すると、それぞれの行為のあいだに行為の場的な混在を志向する傾向が認められることである。概していえば、家族生活の場で行為が場的に混在する使われかたが志向される傾向がみられるのである。

いっぽう家族にとって最もウチ向きの食事と親しい間柄の客の応対とは、実態レベルでは非混在のものが混在をおおきくうまわっている。これは前述したとおりである。認識レベルでは、この両者の混在のしかたは実態レベルの傾向とはかなり異なっている。認識レベルでは、両者の行為の混在を志向するものが非混在を志向するものと並立してあらわれているのである。

この認識レベルのしめす傾向は、標本住居で変容期まえに保たれていた重層的な家族生活の場の使われかたに回帰する現象ではないかと筆者は推測している。そのよ

それぞれの項目（表2-1）についての回答のうち、「そう思う」「ややそう思う」と回答したものの全標本（19人）にたいする割合。

図3 行為の場の志向のされかた（認識レベル）

うな認識のしかたが人々の意識のレベルに内在しているとみているのである。

(2) 行為の場の分化移行のしかた

家族生活行為および接客生活行為の場の分化移行のしかたを実態レベルと認識レベルとで比較する（図3）。ここでいう行為の場の分化移行のしかたとは、標本住居で変容期まえに保たれていた行為の場からみた行為の場の

表3 家族生活の場のくみたてられかたをあらわす項目

行為の場の分節・非分節	
1	食事の場と炊事の場はおなじほうがよい
2	休息の場と食事の場はおなじほうがよい
3	親しい客の応対の場と炊事の場はおなじほうがよい
4	親しい客の応対の場と食事の場はおなじほうがよい
5	あらたまった客の応対の場と食事の場はおなじほうがよい
行為の場のしつらえられかた	
6	食事の場は「和室」のほうがよい
7	休息の場は「洋室」のほうがよい
8	「洋室」に炬燵をおくのはかまわない
9	「和室」にソファなどの椅子類をおくのはかまわない

それぞれの項目は、聞き取りにもちいた言いまわしを簡略にしてしめしている。

休息：家族が休息をとったりくつろいだりする

「和室」：畳のしきつめられた部屋

「洋室」：畳のしかれていない部屋

変位のされかたのことである。

変容期まえに保たれていた行為の場は、ダイドコロが家族生活行為（食事、休息：食事後のくつろぎなど）および接客生活行為（親しい間柄の接客）の場となり、ザシキ・ナカノマが接客行為の場となるものと推測できる。

実態レベル認識レベルともに行為の場の分化移行のしたはおおきく変わるものではない。それは①食事の場はダイドコロからミズヤに移っている（分化）、②休息および親しい間柄の客の応対の場はダイドコロから位置を変えていない（未分化）、ものである。

いっぽうあらたまった客の応対の場は、実態レベルではザシキ・ナカマのほかダイドコロが使われて、変容期まえに保たれていた位置から分化する傾向にある。しかしながらこのダイドコロをあらたまった客の応対の場とする認識のされかたはよわい。これはあらたまった客の応対の場をザシキ・ナカマに置く変容期まえの使われかたに回帰する志向性のあらわれとみられる。

これより、①食事の場が分化する傾向、休息の場および親しい間柄の客の応対の場の非分化の傾向は、実態レベル認識レベルともに定着している、②あらたまった客の応対の場は、実態レベルでは分化と非分化とが並列するが、認識レベルでは非分化が志向される、ような傾向がみいだせる。

2.3 家族生活の場のくみたてられかたとその展開

変容期まえの家族生活の場はダイドコロとミズヤとに空間的に分節しているものである。ここでは実態レベルでの家族生活の場の分節のされかたと認識レベルにあらわれる行為の場の分節非分節の志向性とを比較する（図4）。

認識レベルでは、内容をイメージしやすいように具体的な複数の行為をあげ、それらの行為をおこなう部屋を分けるかを問

項目	行為の場	場のくみたてられかた (%)		認識レベル	分節
		実態レベル	分節	非分節	
1 食事と炊事の場		79.0	21.0	84.2	15.8
2 食事と休息の場		42.1	57.9	21.0	79.0

項目は表3参照

非分節：ふたつの行為の場がおなじ部屋の場合

分節：ふたつの行為の場がことなる部屋の場合

実態レベルの食事の場と炊事の場との関係、食事の場と休息の場との関係は、標本住居ごとにミズヤ・ダイドコロでおこなわれている食事系の行為・炊事系の行為・休息系の行為の場から判断したものである。認識レベルは生活体ごとの聞き取りによる。

図中数字は、実態レベルは全標本住居（11戸）にたいする、認識レベルは、全標本（19人）にたいする割合。

図4 家族生活の場のくみたてられかた（実態レベル、認識レベル）

	行為の場のしつらえられかた (%)			
	実態レベル		認識レベル	
	「和室」	「洋室」	「和室」	「洋室」
食事の場	63.2	36.8	52.6	47.4
休息くつろぎの場	100.0	10.5	89.5	

実態レベルは、標本住居ごとの食事系の行為・休息系の行為のおこなわれる部屋（ミズヤ・ダイドコロ）のしつらえ。

図中数字は、実態レベルは、全標本住居（11戸）にたいする、認識レベルは、全標本（19人）にたいする割合。

休息くつろぎ：食事後の休息・くつろぎ

図5 家族生活の場のしつらえられかた（実態レベル、認識レベル）

うている。

実態レベルの食事の場と炊事の場との分節のされかたは非分節に傾斜するものである。この傾向は認識レベルでも変わらない。むしろ両者を比べると、認識レベルでは非分節を志向する傾向はつよくなっている。

実態レベルでは、食事の場と休息の場との分節のされかたは分節と非分節とがあいなかばしている。認識レベルの両行為の場の分節のされかたは、実態レベルとは対照的である。それは分節を志向する傾向がつよくあらわれているものである。

以上の実態レベルと認識レベルの家族生活の場の分節のされかたからは、食事の場と休息の場とが分節化し、食事の場と炊事の場とが非分節化する志向性をよみとることができる。これは、休息の場のしつらえられかたが、実態レベルの「和室」（畳がしきつめられた部屋）から認識レベルでは「洋室」（畳がしかれていない部屋）が志向されるように変わる傾向（図5）とあわせて、家族生活の

表4 身体動作のしかたをあらわす項目*

家族生活における身体動作のしかた	
1	炊事は内容によって床にすわっている
2	食事は座卓をつかい床にすわっている
3	食事は、ときによってダイニングテーブルと座卓とを使いわけ
4	床にすわったり寝ころんだりして休息（食事後の休息など）をとったりくつろいだりする
接客生活における身体動作のしかた	
5	親しい客の応対は床にすわっている
6	あらたまった客の応対は床にすわっている
家事生活における身体動作のしかた	
7	家事（洗濯ものをたたむ、アイロンをかける）は床にすわっている
個人的生活における身体動作のしかた	
8	家族が休息をとったりくつろいだりする場で床によこたわってごろ寝や昼寝をする
9	床にすわって本を読む・新聞を読む
10	床にすわって手紙をかく

*家族生活の場でおこなわれるもの

それぞれの項目は聞き取りにもちいた言いまわしを簡略にしてしめしている。

場のくみだてられかたの側面での住生活スタイルの展開のされかたが傾向としてあらわれているものである。

2.4 身体動作のしかたとその展開（図6）

家族生活の場でおこなわれる行為にともなう身体動作のしかたには、実態レベル認識レベルともに、床面にすわる・床に横たわるなどの姿勢が支配的にあらわれている。変容期まえの家族生活の場に保たれていた身体動作の技法は現在に保たれているのである。またそれは今後の住生活スタイルに継承されるものと推測できる。

さきにみたように家族生活の場は、食事の場と炊事の場とが一体化し食事と休息の場とが分節する傾向をもつものである。家族生活の場の分節はすすんでも、そこでの行動のしかたは床志向の身体動作が継続するものなのである。

実態レベルでは、床面に依拠する姿勢をとる身体動作のしかたが典型的にあらわれている。非床の姿勢の身体動作のしかたは、食事行為および個人的生活行為の一部に認められるのみである。また認識レベルでは、家族生活行為・接客生活行為・家事生活行為・個人生活行為とともに、実態レベルに比べると非床の身体動作のしかたを志向するものは多い。しかしながら両レベルともに床面に依拠する姿勢を基調にする傾向は変わらない。

3. 家族生活の場にあられる行動のしかた

家族生活の場における家族生活行為（炊事系の行為、食事系の行為、休息系の行為）および接客生活行為（接客系の

身体動作のしかた (%)

項目	行為	実態レベル		認識レベル	
		床	非床	床	非床
1	炊事	100.0		36.8	63.2
2	食事	73.7	26.3	63.2	36.8
4	休息	100.0		84.2	15.8
5	親接	100.0		73.7	26.3
6	あ接	100.0		84.2	15.8
7	家事	100.0		89.5	10.5
8	個1	100.0		73.7	26.3
9	個2	100.0		79.0	21.0
10	個3	94.7	5.3	57.9	42.1

図中数字は全標本（19人）にたいする割合 項目は表4参照

床：行為にともなう姿勢が床面に依拠するもの（床にすわる、床に横たわるなど） 非床：行為にともなう姿勢が床面に依拠しないもの（立つ、腰かけるなど）

行為 休息：食事後にくつろぐ 親接：親しい間柄の客を応対する あ接：あらたまった間柄の客を応対する 家事：洗濯物をたたむ・アイロンをかける 個1：個人的生活行為（ごろ寝・昼寝をする） 個2：同（本や新聞を読む） 個3：同（手紙を書く）

図6 身体動作のしかた（実態レベル、認識レベル）

行為：親しい間柄の客の応対・あらたまった客の応対）の場的な重層性および領域性には、つぎの型を共時的にみいだせる（以下、生活型）。

これらの生活型は、家族生活の場における行動のしかたが、どのように共時的に展開しているのかを説明するために、標本住居ごとに、概括的に家族生活行為・接客生活行為がおこなわれる場的な領域および行為のあいだのかさなりかたをみだし、その型を抽出したものである。

I型：食事系の行為およびそれにつらなる休息系の行為などの家族生活行為と接客生活系の行為（親しい間柄の客の応対）とはダイドコでかさなっておこなわれる。また炊事系の行為はこれとは分けられミズヤを中心におこなわれる。

II型：食事系の行為の場はミズヤに移る。ミズヤでは食事系の行為と炊事系の行為とが場的にかさなる。ダイドコでは休息系の行為などの家族生活行為と日常的接客生活行為（親しい間柄の客の応対）とがおこなわれる。I型に比べて家族生活の場の中心は、いくぶんかダイドコからミズヤに移る。

III型：食事系の行為およびそれにつらなる休息系の行為などの家族生活行為はミズヤでおこなわれる。また日常的接客生活行為（親しい間柄の客の応対）はダイドコを中心に（またはナカマで）おこなわれる。家族生活の場的な中心はダイドコからミズヤに移る。

3.1 住生活行為とその場的な領域性

（1）家族生活の場において形成される「生活領域」

家族生活の場における生活体の行動のしかたには、次

表5 道具だてでおこなわれる行為

延べ行為数 (%) *2

	行為の系*1							計
道具だて	炊事	食事	休息	家事	個人的生活	接客	更衣	
ミズヤ								
流し台	86							86
コンロ台	19							19
ダイニング								
テーブル	4	15						19
座卓	5	30	2		1	1		39
なし			7	2	1		1	11
ダイドコ								
座卓		12	11		21	19		63
なし			16	26	24			66
ナカマ								
座卓						12		12
なし				5				5
ナンド								
机					1			1
布団					12			12
ベッド					3			3
なし							12	12
ザシキ								
座卓					1	6		7
布団					2			2
なし			1		2		2	5
カゲノマ								
なし							1	1
その他								
机					1			1
布団					1			1
ベッド					4			4
なし			1	2	2		3	8
道具だてに 関係する行為	114	57	13		47	38		269 (71.4)
道具だてに 関係しない行為			25	35	29		19	108 (28.6)
計	114	57	38	35	76	38	19	377 (100.0)

なし：道具だてに関係しない行為

*1 行為の系と行為 炊事系：食材料を水洗いする・加工（根をむしるなど）をする・加工（包丁で切るなど）をする・調理（加熱など）をする・食器を洗う・料理を盛りつける 食事系：朝食をとる・昼食をとる・夕食をとる 休息系：食事後にくつろぐ・テレビをみる、家事系：洗濯物をたたむ・アイロンをかける 個人的生活行為の系：本や新聞を読む・手紙や書類を書く・就寝する（夜間に）・昼寝やごろ寝をする 接客系：親しい間がらの客を応対する・あらたまった間がらの客を応対する 更衣系：外出まえや帰宅後の着がえをする

*2 それぞれの行為の系でとりあげる行為の延べ行為数。

のような場的な領域性が存在する（表5）。

(i)標本住居の家族生活は、ミズヤ・ダイドコを中心にしておこなわれる。ミズヤ・ダイドコ・ナカマの要素空間で構成される家族生活の場では、炊事系・食事系・休息系などの家族生活行為のほかには家事系・個人的生活行為の系などの行為（具体的な行為は表5の脚注を参照）が場的に混在しておこなわれている。

表6 行為とそれにもなう姿勢との関係

延べ行為数 (%) *

姿勢の系						計
よこたわる	すわる	しゃがむ	腰かける	たつ		
行為の系べつ						
炊事		4 (3.5)	1 (0.9)		109 (95.6)	114 (100.0)
食事		42 (73.7)		15 (26.3)		57 (100.0)
休息	3 (7.9)	35 (92.1)				38 (100.0)
家事		35 (100.0)				35 (100.0)
個人的生活行為	39 (51.3)	35 (46.1)		2 (2.6)		76 (100.0)
接客		38 (100.0)				38 (100.0)
更衣					19 (100.0)	19 (100.0)
計	42 (11.1)	189 (50.1)	1 (0.3)	17 (4.5)	128 (34.0)	377 (100.0)
生活型べつ						
I型	10 (12.5)	42 (52.5)			28 (35.0)	80 (100.0)
II型	24 (11.0)	106 (48.4)	1 (0.5)	16 (7.3)	72 (32.9)	219 (100.0)
III型	8 (10.3)	41 (52.6)		1 (1.3)	28 (35.9)	78 (100.0)

*それぞれの行為の系でとりあげる行為の延べ行為数。

(ii)採取した行為の大部分（377例のうち269例、71.4%）は、道具だてと関係しておこなわれている。行為のおこなわれる場の大部分は道具だてに関係してくみだてられており、それを場にするような「生活領域」が形成されている。いっぽう標本住居の家族生活の場における「生活領域」の形成で特徴的なのは、道具だてに関係しない場でも多くの行為がおこなわれていることである。採取した行為の約30%は道具だてに関係せずにおこなわれている。

(2) 家族生活の場における行為とその領域性（図7）

採取した行為（炊事系・食事系・休息系・家事系・個人的生活行為の系・接客系・更衣系の行為）のすべては床上部分でおこなわれるものである。一部の標本住居では土間の炊事の場をもつが、採取した住生活行為のすべては床上化された要素空間でおこなわれており、家族生活の場の主体は床上にある。行為ごとにみいだした場的な領域性は、以下のようなものである。

(i)生活型の展開と行為の場的な領域性とは関係している。ミズヤ・ダイドコ・ナカマの家族生活の場において生活型がI型からIII型へと展開するのにもとない、行為の場はダイドコからミズヤ・ナカマに比重を移すように変わっている。ダイドコの家族生活の場としての位置は変容期を経て相対的に低下しており、ミズヤにおきかわっている。

*カゲノマおよびその他の要素空間における行為をふくむ。

*カゲノマおよびその他の要素空間における行為をふくむ。

また世代のあいだでの家族生活における行為の場の領域の形成のされかたにおおきな差異はみられない。

(ii)家族生活の場でもっとも多く採取できたのは炊事系の行為なのだが、そのすべてはミズヤを行為の場としている。

(iii)休息系・個人的生活行為の系の行為は生活型の展開にともないダイドコからミズヤまたはナカマへと行為の場を移している。これは生活型に関係する食事など家族生活行為の場的な変位にともなったものと推測できる。

(iv)接客系の行為の多くは、ダイドコおよびナカマを場にしておこなわれている。生活型の展開にともない家族生活行為の場がダイドコからミズヤへ移行することによって、家族生活行為の場と接客生活行為の場とは分けられるように変っている。

3.2 家族生活の場にあられる身体動作のしかた

(1) 行為とそれにともなう姿勢との関係 (表6)

標本住居の家族生活の場でおこなわれる生活体の行為

にともなう姿勢は多様なものである。それは、基本となる①よこたわる姿勢の系、②すわる姿勢の系、③しゃがむ姿勢の系、④腰かける姿勢の系、⑤たつ姿勢の系、に代表されるものである。

行為とそれにともなう姿勢との関係を以下に要約する。

(i)標本がもっとも集中している姿勢の系は、すわる姿勢を基本にするものである。家族生活の場でおこなわれる行為の約半数はすわる姿勢でおこなわれるものである。たつ姿勢・よこたわる姿勢はこれにつづいている。これにたいして腰かける姿勢はほとんどあらわれていない。標本住居における身体動作のしかたは、たつ姿勢と床面に依拠する姿勢とを基調にしたものと考えられる。

(ii)行為と姿勢とのあいだには、生活型の展開にともなう一定の関係がみられる。それは概括的にみれば、①炊事系の行為のほとんど(114例のうち109例、95.6%)はたつ姿勢でおこなわれる、②食事系の行為にともなう姿勢は、すわる姿勢と腰かける姿勢とが前者に比重をおいて並立するものである、生活型がI型からII型へと展開して、

表7 行動のしかたの型の典型化傾向

	行為の系							姿勢の系					計
	炊事	食事	休息	家事	個人的生活行為	接客	更衣	よこたわる	すわる	しゃがむ	腰かける	たつ	
① 行動のしかたの型*1	9	9	11	8	22	6	5	13	39	1	5	12	70
② 典型となる行動のしかたの型*2	6	6	5	2	5	3	1	2	16		3	7	28
③ 典型化率 (%)	66.7	66.7	45.5	25.0	22.7	50.0	20.0	15.4	41.0		60.0	58.3	40.0
④ 行為数	114	57	38	35	76	38	19	42	189	1	17	128	377
⑤ 典型となる型の行為数	105	45	29	26	55	30	12	26	144		15	117	302
⑥ 典型となる型へ行為が集中する割合 (%)	92.1	78.9	76.3	74.3	72.4	78.9	63.2	61.9	76.2		88.2	91.4	80.1

*1 行為・行為にともなう姿勢・行為のおこなわれる場（道具だてによってあらわされる「生活領域」）のくみあわせ

*2 行為数がそれぞれの行為の系の平均（それぞれの行為の系の延べ行為数／行動のしかたの型）をこえている行動のしかたの型。

①②はみいだされる型の数、③は②／①（％）、④⑤は行為数、⑥は⑤／④（％）

食事系の行為の場がダイドコからミズヤに移るのにとともに腰かける姿勢がとられるような変化がみられる、また生活型がIII型になるとすわる姿勢だけがとられる、③休息系・個人的生活行為の系の行為でとられる姿勢は、床面に依拠する姿勢が支配的である、④接客系・家事系の行為はすわる姿勢でおこなわれる、のようである。

(2) 姿勢と行為の場との関係 (図8)

行為にともなう姿勢はそれぞれの行為の場で特徴的にえらばれている。それは①ミズヤは多様な身体動作のしかたがあらわれる生活の場であるが、典型となるのはたつ姿勢とすわる姿勢である、②ダイドコで基調になる姿勢は、すわる姿勢・よこたわる姿勢などの床面に依拠する姿勢である。これは世代のあいだでかわらず、生活型が展開して家族生活行為の場的な変位がすすんでも変わることなく保たれている、のようである。

3.3 家族生活の場にあらわれる行動のしかたの型

生活体の行動のしかたを外面的にあらわれる要素の関係を総合化することによって説明する。ここでは行動のしかたをくみだててみるとみられる要素から、①生活体のおこなう行為、②行為にともなう姿勢、③行為のおこなわれる場（道具だてによってあらわされる「生活領域」）をえらび、行動のしかたの型を概括的に抽出する。えられた行動のしかたの型は次のように解釈できる（表7）。

(i) 家族生活の場でみいだされる行動のしかたの型は多様なものである。それはいくつかの支配的な型に典型化するものである（377例のうち302例、80.1％）。みいだした70種の行動のしかたの型のうち28種（40.0％）に標本は集中しているのである。この典型となる型で代表されるよ

うな行動のしかたの様式が標本住居の家族生活の場では形成されている。

(ii) 行動のしかたが典型化する傾向は場的に異なるものである。典型となる型にもっとも標本が集中しているのは、ミズヤおよびダイドコにおける行動のしかたである。とくに典型化が顕著なのは、ミズヤのたつ姿勢・すわる姿勢をとる行動のしかた、ダイドコでのすわる姿勢・よこたわる姿勢をとる行動のしかたなどである。

(iii) 行動のしかたが典型化する傾向は姿勢の系で異なる。それぞれの姿勢の系では行為の系とつよく関係し場的に特化した行動のしかたがみいだされる。

典型化が顕著にみとめられるのは、標本の比較のおおいものでは、①すわる姿勢の系では、食事系・家事系・接客系、②たつ姿勢の系では、炊事系・更衣系の行動のしかたである。またうえに比べると標本数は少ないのだが、典型化しているのは、①腰かける姿勢の系では食事系、②よこたわる姿勢の系では個人的生活行為の系、③すわる姿勢の系では、休息系・個人的生活行為の系、の行動のしかたである。

4. 結び

(i) 住生活スタイルの3要素ごとに認識レベルと実態レベルとを比較して得られる結果は以下のようである。

(a) 変容期まえから保たれている住生活スタイルの要素を継承する傾向（住生活スタイルの継承性）、現代化のもとでの住生活スタイルの要素の変化を肯定し容認する傾向（住生活スタイルの現状の肯定性）、住生活スタイルの要素が現代化におうじて変化する傾向にあるにもかかわらず、変容期まえに保たれていたスタイルに回帰する傾向

(住生活スタイルの回帰性)がみいだされる。

(b)伝統的に保たれ継承されてきた家族生活における住生活スタイルは、住生活の要素の豊富化のもとで緩やかに変わりつつあるものと推測できる。実態レベルに比べて、認識レベルの行為のおこなわれかた・行為の場のくみだてられかた・身体動作のしかたのそれぞれに、萌芽的ではあるが複数のスタイルが並列的にあらわれる傾向がよみとれるからである。これより近未来に並列的な住生活スタイルが展開するのではないかと推測することは可能である。

(ii)家族生活行為および日常の接客生活行為の場的な変位からみいだされる生活型の展開と生活体の行動のしかたとは強く関係している。標本住居における行動のしかたの型およびその要素のあいだにみられる関係からは、以下に要約する結果がえられる。

(a)標本住居の家族生活の場にあられる行動のしかたは多様なものだが、それはいくつかの支配的な型に典型化するものである。この傾向からは一応の社会化の過程を経て完成されたとみられる行動のしかたが現在の農村住居に形成されている傾向がうかがえる。

(b)家族生活の場における生活体の行動のしかたには場的な領域性が存在する。生活型の展開と行為の場的な領域性とは関係している。生活型が展開するのにともない家族生活行為の場はダイドコからミズヤに比重を移すように変化しているのだが、ダイドコの家族生活の場としての位置は相対的に低下している。

(c)標本住居にあられる姿勢は多様なものであるが、行為ととられる姿勢とのあいだには一定の関係が存在している。また行為にともなう姿勢は生活型の展開に関係する場的な領域性をもつ。

標本住居における身体動作のしかたは、たつ姿勢と床面に依拠する姿勢とを基調にするものだが、食事系の行為の場がダイドコからミズヤに移行する段階では腰かける姿勢があらわれる。この段階でも、基調になる姿勢は変わらずに床面に依拠する姿勢なのだが、これに並んでダイドコではたつ姿勢がとられ、ミズヤでは腰かける姿勢が対照的にあらわれる。しかしながら家族生活行為の場がダイドコからミズヤに移る段階になると、ミズヤでの身体動作のしかたは床面に依拠する姿勢を基調にするものに回帰している。

本稿では「家族接客一体型」の農村住居をとりあげている。これは鹿児島県薩摩町の農村住居をフィールドにする前稿につづくものである。両者の住様式の諸要素の連続性および変容の過程には多くの共通性と個別性ともみいだせるのだが、本稿ではその比較はおこなっていない。現代の農村住居の住様式のしくみにあらわれる地域性の追求は、今後事例をかさねて報告することにする。

付記：本稿は(財)第一住宅建設協会・(財)地域社会研究所の研究助成をうけておこなった研究の一部である。

注

1) おもに食事・炊事およびそれにつらなる日常生活行為におうじて使われる農村住居の部分。

2) 変容期まえの農村住居にみいだされる家族生活行為の場が日常の接客生活行為の場とかさなるとみられる生活のしかたを基調にする間取りの系^{文4)}。

3) 生活体が住居内で日常的におこなう行為ごとに行為の場・行為にともなう身体動作のしかたの関係をあらわす概念。

4) このほか、行為のおこなわれかたでは、行為のおこなわれかたにあらわれる個と家族とのかかわりあい(個別・集団)、行為の場のさだまりかた(特定・不定)、行為の場のくみだてられかたでは、道具だて・非道具だて、行為の場のかたづけられかた(整然・雑然)を採用している。これらの説明軸は住生活スタイルの説明を単純化するために割愛した。

5) 日常生活過程で不断におこなわれる行為をひとつのまとまりとして採取するには方法的な制約をとまなう。ここでは前稿^{文1)}で家族生活の場で観察採取した行為のうち、住居のおなじ場で比較的継続しておこなわれるものを代表的にえらんでいる。

6) 人間の姿勢や動作がもつ一定の型は、M・モースが「身体技法」という概念でとらえ、多くの「身体技法」の型が、民族・地域だけでなく年齢や性別によっても相違し、それぞれの文化のなかで伝承されることを指摘している。また「それぞれの社会は固有の身体運動様式をもっており、道具をもちいる技法に先だててありとあらゆる身体技法がある」と指摘している^{文5)}。また野村雅一は「ある社会がもつ衣服や家具や作業用具などは、その社会の人間がもつ習慣的なしぐさや姿勢の型(ボタン)にかなりの程度規定されている」と述べている^{文6)}。

7) 採取できる行為のひとつひとつに対応する住生活財などでくみだてられる家族生活の場の部分。

引用文献

文1) 塩谷寿翁・下原拓也ほか：家族生活の場にあられた行動のしかたの型 鹿児島県薩摩町中津川別野下の場合 農村住居における住様式の連続性と変化に関する実証的研究、日本建築学会計画系論文報告集、第436号、pp.87-96、1992年6月

文2) 塩谷寿翁・下原拓也：住生活スタイルとその展開 農村住居における住様式の連続性と変化に関する実証的研究—秋田県仙北郡の典型事例の場合—その1、日本建築学会近畿支部研究報告集、第33号、pp.545-548、1993年6月

塩谷寿翁・下原拓也：家族生活の場にあられる行動のしかたの型 農村住居における住様式の連続性と変化に関する実証的研究—秋田県仙北郡の典型事例の場合—その2、日本建築学会近畿支部研究報告集、第33号、pp.549-552、1993年6月

文3) 下原拓也・塩谷寿翁：住生活スタイルとその展開 農村住居における住様式の連続性と変化に関する実証的研究—秋田県仙北郡の典型事例の場合、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)、pp.1229-1230、1993年9月

文4) 塩谷寿翁：農村住居にあらわれたふたつの生活型、民俗建築、第100号、pp.86-100、1991年

文5) M・モース(著)有地亨・山口俊夫(共訳)：社会学と人類学Ⅱ、弘文堂、1976年

文6) 野村雅一：しぐさの世界 身体表現の民族学(NHKブックス429)、日本放送出版協会、1983年1月

(1993年12月1日原稿受理、1994年6月22日採用決定)